

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：ブーテレイ スーザン

スーザン・ブーテレイ氏の博士学位請求論文『目取真俊の世界——歴史・記憶・物語』は、沖縄で生まれ育ち作家活動が続けている芥川賞作家目取真俊の文学の全体像を、沖縄戦をめぐる精神的外傷と記憶の在り方を中心としながら考察したものである。

「序文 歴史・記憶・物語——目取真俊の作品を通して見える世界」、「第一章 目取真俊の世界」、「第二章 『水滴』論」、「第三章 『風音論』」、「第四章 『魂込め』論」、「結論」という構成で二〇一一年一二月一五日に影書房から単行本として出版されたものを審査対象とした。

第一章では、目取真俊が、それまで流布されて来た「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり部隊」の物語に象徴されていた沖縄戦の集合的記憶を批判的に対象化し独自の文学的形象を生み出したことが明らかにされている。

初期作品である『平和通りと名付けられた街を歩いて』の表現を具体的に分析しながら、非現実的で幻想的な表現を取り込み、擬似体験的表現法を導入し、イメージや言葉の意味を断片化して連鎖させることが、目取真俊の小説表現の独自性であることが論証される。

第二章では一九九七年に発表され芥川賞を受賞した代表作『水滴』が論じられている。主人公徳正の右足が膨れ出し、そこから滴る水を、沖縄戦で死んだ兵士たちが飲みにくるといふ幻覚をとおして、「靖国思想」や「殉国美談」に回収されることのない、個人的な戦争の体験を表現することが可能になったことが分析されている。

またそれまでの沖縄戦をめぐる戦争神話を解体することによって、皇民化教育や同化政策をめぐる、日本と沖縄との関係性が、あらためて問い直されていく過程も明らかにされている。

とくにウシという女性の登場人物に与えられた役割の分析を通じて、日本に同化されていない沖縄の土着の文化が、身体感覚に内在されていることが論証されている。

第三章では一九九七年に発表された『風音』が論じられている。沖縄固有の風葬という儀式が行われる風葬場に、特攻隊員の遺骨がおかれているという設定によって、沖縄の人々の精神的文化とその同一性が、どのように戦争によって破壊され、喪失させられたかが明らかにされている。

とりわけ知覚感覚的経験を想起させる言葉で読者に疑似体験をさせるような表現を通じて、死者の声なき声を読者に伝える試みの分析に力点がおかれている。

『風音』という小説の表現の特質が、作中人物の行為や出来事の詳細は言語化せず、小説の中に散在させられた断片的なイメージを、読者自身がつなぎ合わせ、物語の空白を自ら埋

めながらストーリーを編み出していくように方向づけるところがあると指摘されている。

第四章では川端康成文学賞を受賞した、一九九八年に発表された『魂込め』^{まがいくみ}が論じられている。

男性主人公が自分の魂を落としてしまったことによって、口の中にアーマン（ヤドカリ）が這いこみ、巣食ってしまうという奇想天外な設定の意味がまず問われていく。第一に魂を落とすことが沖縄戦をめぐる精神的外傷と深くかかわり、第二に口中に巣くうアーマンも戦争と密接に関わっていることが、細部の表現と小説の全体構造を結びつけながら明らかにされていく。

また「琉球処分」という歴史的出来事に小説内部で言及することによって、大日本帝国に植民地された近代の沖縄の問題が前景化されることが分析されている。

このアーマンを追い出す宗教的儀礼を担う神女（かみんちゅ）を登場させることで、琉球王朝時代から現代にいたる沖縄文化の担い手であった、女性達の役割が前景化されるということが明らかにされていく。

こうした個別の小説分析をとおして、スーザン・ブーテレイ氏は、目取真俊の小説の根底に、沖縄の土着の文化が破壊されたことによって、沖縄の人々の同一性が奪われていったことが「通奏低音」として、またあるときは「主旋律」のように表現されていると主張する。

そして目取真俊が、一つひとつの小説ごとに異なる独特な語り、ジェンダーの違いを意識的に導入した複数の視点の設定、そして沖縄固有の風土と文化を喚起する言葉によって、失われつつある伝統文化を読者自身に問い直させようとしていることが明らかにされている。

また読者が日本語読者であることが意識化され、要所要所に沖縄語（ウチナーグチ）が使用されることによって、日本と沖縄の歴史的関係性が、沖縄戦から現在にいたる過程を中心としながら再認識されると、ブーテレイ氏は分析している。

審査の中では、章題があまりに単純すぎること、性的描写や暴力の表現の各小説における役割についての分析が不十分であること、現在の沖縄がおかれている状況に、どれだけ目取真俊の小説が向かい合っているかということへの言及が不十分であることなどが批判された。

しかし、目取真俊という沖縄戦を体験していない世代の作家が、自らの小説の言語を媒介にして、現在の読者に、沖縄戦にいたる近代日本と沖縄の関係性の記憶を受け渡すことを可能にしている文学的特質がどこにあるのかを、明確にした本論文の学問的成果は高く評価できるという点で審査員の見解は一致した。また、まだ日本人研究者でも十分に実現していない目取真俊という作家の全体像を明らかにしたということでは、画期的な研究書であることにおいても一致した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。